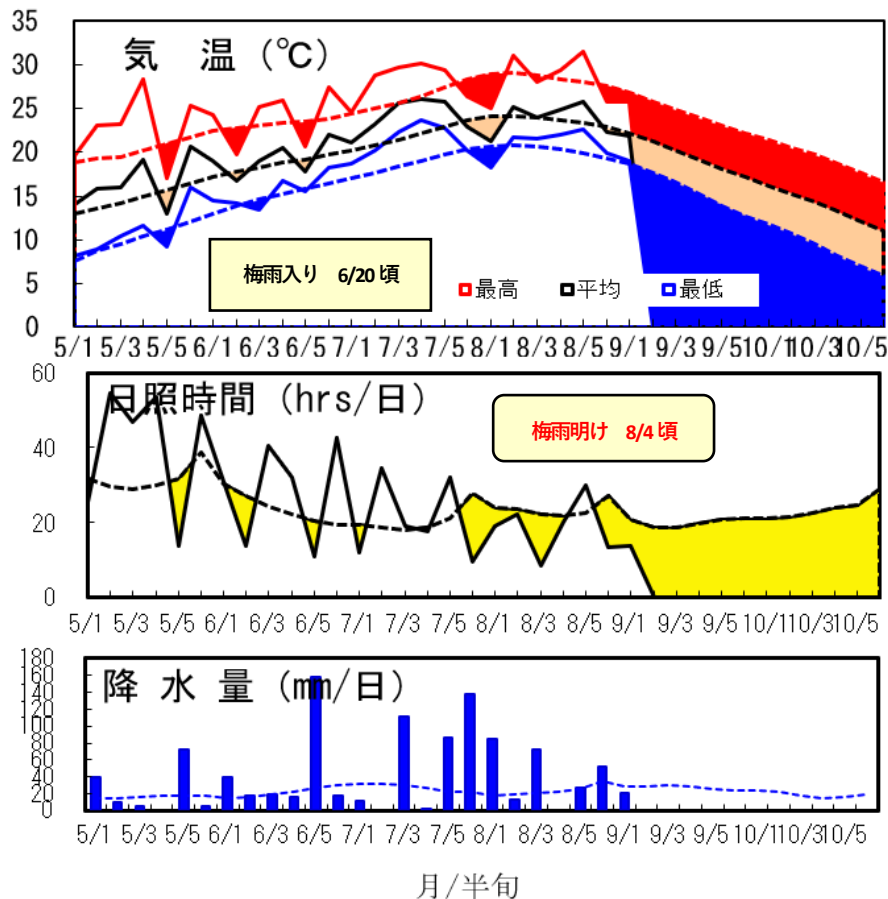


～開花期は 平年より3～5日程度遅い～

～降雨で生育停滞のほ場が多い 可能な限りの排水対策を！～

1 気象経過



◆9月10日発表 東北地方の1か月予報(9月12日～10月11日までの天候見通し)【気象庁ホームページより】

- ・ 天気は、数日の周期で変わる。
- ・ 向こう1か月の気温は、高い確率50%，平年並みの確率40%，低い確率10%。
- ・ 降水量は、多い若しくは平年並みの確率40%，少ない確率20%。
- ・ 日照時間は、多い若しくは平年並みの確率30%，少ない確率40%。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)			
気温	東北地方	向こう1か月 09/12～10/11	10 40 50
		1週目 09/12～09/18	10 40 50
		2週目 09/19～09/25	20 40 40
		3～4週目 09/26～10/09	10 40 50
降水量	東北地方	向こう1か月 09/12～10/11	20 40 40
日照時間	東北地方	向こう1か月 09/12～10/11	40 30 30

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

2 生育状況（宮城県古川農業試験場 生育状況 大豆作況試験 9/1 調査）

① 5月25日播種（タンレイ、ミヤギシロメ）

- ・前回調査(8/10)以降も直近5年平均と比べて寡照で推移したため、平年と比較して着莢節数が少なかった。
ミヤギシロメでは曇化・倒伏も発生しており、着莢節数の減少が著しい。

② 6月12日播種（ミヤギシロメ）

- ・5月25日播種と同様に曇化・倒伏傾向であり、**平年と比べ着莢節数が少ない。**

③ 7月6日播種（タンレイ）

- ・主莖節数は平年並みだが、**主莖長が平年と比較して長く、徒長傾向である。**また、分枝の発生が少なく、**総節数、着莢節数ともに平年を下回った。**

播種期	品種名	開花期（月/日）			主莖長(cm)			主莖節数（節/本）		
		本年値	前年差	平年差	本年値	前年差	平年差	本年値	前年差	平年差
5/25	タンレイ	7/24	6日遅い	3日遅い	77	+18	-1	16.3	+1.3	+0.1
播種	ミヤギシロメ	8/2	8日遅い	5日遅い	124	+43	+18	18.8	+2.6	+1.0
6/12播種	ミヤギシロメ	8/8	8日遅い	4日遅い	96	+1	-9	15.9	-1.4	-1.3
7/6播種	タンレイ	8/14	4日遅い	3日遅い	73	+8	+8	12.3	+0.6	+0.6

播種期	品種名	分枝数（本/本）			総節数（節/本）			着莢節数（節/本）		
		本年値	前年差	平年差	本年値	前年差	平年差	本年値	前年差	平年差
5/25	タンレイ	4.3	+1.2	+0.2	41.9	+5.5	+2.9	26.7	-4.3	-2.6
播種	ミヤギシロメ	5.8	+2.5	+1.3	64.5	+17.5	+7.8	22.0	-4.2	-6.9
6/12播種	ミヤギシロメ	4.6	+1.1	+0.5	44.9	+1.1	-3.8	16.7	-7.4	-7.4
7/6播種	タンレイ	1.5	-0.4	-0.6	18.0	-4.2	-2.8	11.8	-3.7	-3.3

注1) 平年差は過去5か年（R3～R7）の平均値との差

注2) 栽植密度は、5/25及び6/12播種が条間75cm×株間20cm、7/6播種が条間75cm×株間10cm（1株2粒播種）

◆開花は平年より3～5日程度遅く、前年より4～8日程度遅い。生育期間中の降水量が著しく多いため、生育量は平年より劣っているほ場がみられる。

◆開花はほぼ終わり、莢伸長期・子実肥大期に入っている。

3 今後の管理

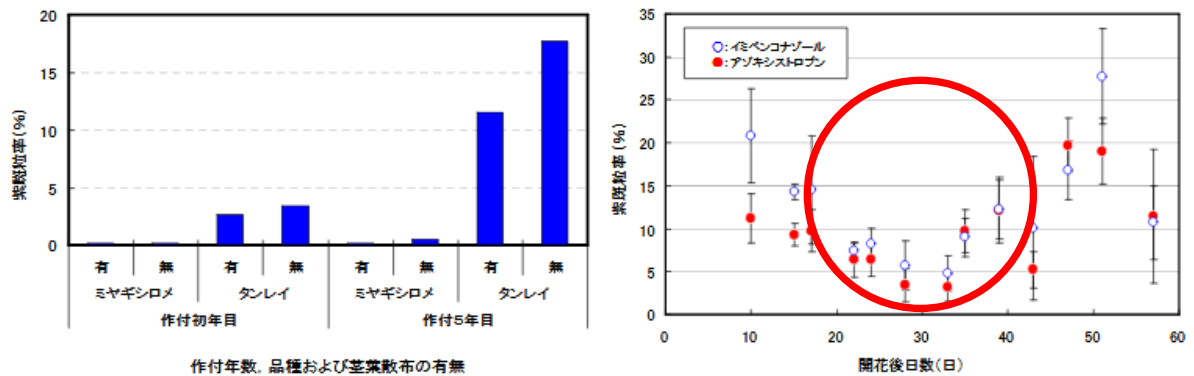
1 湿害対策

- ・本年は降水量が多く、耕起・播種作業が遅れたり、出芽不良から播き直しを行っているほ場も見られる。また、断続的な降雨により、中耕・培土が遅れたり、実施できなかったほ場もみられる。
- ・湿害を受けやすい時期は、播種直後の発芽期、根粒着生から開花前までの生育前期及び子実が肥大する生育後期である。**明きよの修繕など、可能な限りの対策を講ずる。**

2 病虫害防除【宮城県病虫害防除所 ホームページ及び発生予報第5号（8月27日発行）より】

(1) 紫斑病

- ・**8月17日～20日の巡回調査の結果**、発生量は「平年並み」と推測される。
- ・本病による紫斑粒の発生は、品質低下の一因となっている。
- ・本病に対する抵抗性には品種間差異があり、ミヤギシロメやタチナガハは「強」、タンレイは「中」である。また、同一ほ場で大豆を連作すると、本病の発生リスクは増加する（下左図参照）。
- ・**薬剤防除の散布適期幅は、大豆の開花後日数で20～40日程度である**（下右図 赤○内が散布適期）。適期に1～2回の薬剤散布を実施する。



【宮城県「普及に移す技術」第 84 号 農業・園芸総合研究所HPより抜粋】

(2) ベと病

- ・巡回調査の結果、発生地点率は平年並み、発病株率は平年よりやや低かったことから、発生量は「平年並み」と推測される。
- ・発生が著しい場合は、単独防除する。

(3) 吸蜜性カメムシ類

- ・巡回調査の結果、発生地点率及び寄生頭数は平年並みであったことから、発生量は「平年並み」と推測される。
- ・山林や雑草地などの越冬地付近で、発生が多くなることがあるので、ほ場をよく観察する。
- ・**吸蜜性カメムシ類は、莢が着き始めてからほ場に飛来し吸汁加害を始め、被害は莢が若い時期ほど大きい。防除は、着莢期から子実肥大中期を重点に2回実施する。**

(4) フタスジヒメハムシ

- ・巡回調査の結果、発生地点率は平年よりやや低く、寄生頭数は平年並みであったことから、発生量は「やや少」と推測される。
- ・第2世代成虫の発生盛期（平年は8月下旬～9月上旬頃）に、薬剤散布を実施する。

(5) マメシンクイガ

- ・前年の子実調査の結果、発生量がやや少なかったことから、越冬量はやや少ないと予想されることから、発生量は「やや少」と推測される。
- ・幼虫が莢の中に侵入して、子実を食害する（下写真参照 病害虫防除所HPより）。
- ・**大豆を同一ほ場で4年以上連作すると、被害が大幅に増加する（下右図参照）。**
- ・**防除適期は、「成虫」の発生盛期～その10日後である「8月第6半旬～9月第1半旬」頃である。**
- ・「シペルメトリン乳剤」、「フルキサメタミド乳剤」及び「クロラントラニリプロール水和剤」は、本種に対して高い防除効果がある。【宮城県「普及に移す技術」第 84, 94 号 農業・園芸総合研究所HPより抜粋】

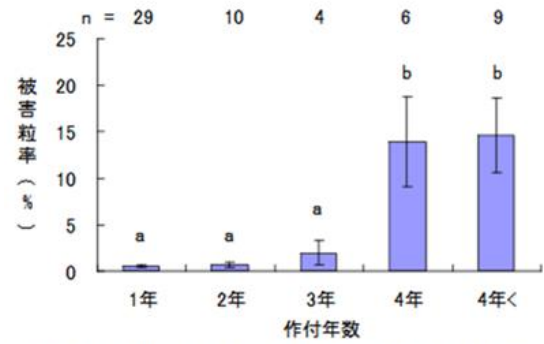


図4 ダイズ作付年数とマメシクイガの被害粒率
同じ添字は、5%レベルで有意差がないことを示す(Tukey-Kramer法)。
図中の縦棒は、標準誤差を表す。

(6) タバコガ類 (オオタバコガ, ツメクサガ)

- ・近年、タバコガ類の幼虫が突発的に多発し、葉や莢を加害する事例が見られる。特にオオタバコガは、大豆以外にもナス、キャベツ、トルコギキョウ等の作物も食害する広食性害虫である。
- ・若齢幼虫は大豆の未展開葉を食害し、中老齢幼虫になると莢も食害する(下写真 赤○内)。
- ・突発的に集中発生することもあるため、ほ場を注意して見回る。



図3. タバコガ類によるダイズの被害葉(左)と被害莢(右)

- ・幼虫の発生密度は開花始期頃にピークを迎え、ピーク時の発生密度は「大豆の播種時期が遅い」ほど高い。また、品種別ではタンレイよりミヤギシロメで高い。【宮城県「普及に移す技術」第94号 農業・園芸総合研究所HPより抜粋】
- ◆「フルキサメタミド乳剤」は、オオタバコガ、ウコンノメイガ及びフタスジヒメハムシに対して高い防除効果がある。【宮城県「普及に移す技術」第95号 農業・園芸総合研究所HPより抜粋】